

1 天草の横穴式石室

古城 史雄

はじめに

天草の古墳時代をテーマとして卒業論文を提出したのは1981年度のことであった。平野が少なく、また大きな河川もない天草地域に、多くの古墳が存在するが、その生産基盤としてどのようなものがあるのか。また装飾のモチーフや箱式石棺の構造から、環八代海における文化交流という事が言われているが、上記以外の具体的な事象にはどのようなものがあるのか。生産基盤の問題と環八代海の文化交流という2つのテーマを設けて取り組んだものの、能力不足に加え、資料の制約もあり、そのほとんどが推測の域をでないものであった。

それから25年以上が経つが、古墳時代関係の調査事例は数える程度であり、特に集落遺跡や生産基盤の研究は、ほとんど進んでいないのが実情である。しかし、1988・1989年の熊本商科大学が行った竹島古墳群の調査、また熊本大学文学部考古学研究室が2003年から2008年にかけて行った広浦古墳や千崎古墳群等の学術調査では、初期横穴式石室の良好な資料が提示されている。特に竹島3号墳や千崎5号墳の調査成果は、天草地域の横穴式石室研究において、大変重要なものである。卒論当時は、天草以外の古墳についての知識も十分でなかったため、天草の横穴式石室の地域性について明確にすることができなかった。その後九州各地域の横穴式石室を見てまわる機会をもち、当時と比べると他地域の横穴式石室の知識も増え、また前述のような新たな資料も提示されたので、再度天草地域の横穴式石室について検討してみたい。

なお、図1に天草周辺の横穴式石室等の分布図を載せているが、ほぼ横穴式石室に間違いがないと思われるものに限定して掲載しているので、実際は更に横穴式石室の数は増えるものと思われる。しかし地域による横穴式石室の分布密度の差はうかがい知ることが出来ると思う。また初期横穴式石室の可能性のあるものを白丸とし、その他を黒丸としている。つまり厳密には黒丸がすべて後期の横穴式石室とは言えないが、ほぼそのような理解でも大きな間違いはないと思われる。また製塩遺跡については、確実なものに限定して掲載している。

1 初期横穴式石室

ほぼ5世紀代の石室という意味で、初期横穴式石室と言う用語を使用するが、同一古墳群中で一連の石室構造の変遷が見られる場合は、6世紀初頭の時期の石室も含めて検討する。

(1) 分類

肥後における初期横穴式石室は、少数の北部九州型石室を除けば、以下の4つに分類できる。なお、北部九州型石室については、天草にも存在する可能性があるため、別項を設けて検討する。

- 1類：ドーム形天井・方形プランで石障を持つもので、肥後では31例程が確認されており、特に初期のものは八代海沿岸に存在する。天草地域では、大戸鼻北古墳（図2-1）、長砂連古墳（図2-2）が該当する。

- 2類：ドーム形天井・方形プランで石障を持たないものである。天草の竹島3号墳（図2-3）と菊池川流域の長明寺坂1号墳の2例のみである。石室構造からは、両者には時間的開きがあり、直接的に結びつくものではないと考えている。この2類は、丸山2号墳・五本黒木丸山古墳・夏崎古墳など、肥前地域でも数例が認められる。
- 3類：長方形プランに石障をもつものである。天井は完全なドーム形ではないものが多い。肥後では、宇土半島のヤンボシ塚古墳、菊池川流域の銭亀塚古墳、また残存している板石を石障とみなしてよければ宇土半島基部の鴨籠古墳の3例がある。肥後以外にもまた九州外にも存在する。特に分布の中心となる地域はなく、広範囲に点在するのが特徴である。また石材に宇土半島産の凝灰岩である馬門石や天草の天草砂岩を使用したものが多いと言う特徴がある。筑後の藤山甲塚古墳の石障には天草砂岩が使用され¹⁾、また岡山の千足古墳の石障も天草砂岩の可能性が高いと言われている（高木1986）。この千足古墳は、長砂連古墳と同じ種類の直弧文の装飾をもつ（小林1976）。
- 4類：長方形プランで石障を持たないものである。天草の千崎5号墳（図2-6）やカミノハナ1号墳・3号墳（図2-4・7）が該当する。後続するカミノハナ古墳群の2号墳・4号墳・5号墳・6号墳（図2-5・8・9）や竹島4号墳（図2-10）も含めれば、8例となるが、分布は天草地域に限定される。

（2）天草の横穴式石室の特色（図2）

まず挙げられるのが、天草を含むこの八代海沿岸地域で1類石室が誕生した可能性が高いことである。大戸鼻北古墳は、球磨川下流域の小鼠蔵1号墳や大鼠蔵尾張宮古墳と並んで初期横穴式石室の中でも初期の古墳である。また、蓋のない箱式石棺を竪穴式石室内に持ち込んだ成合津2号墳、巨大化した箱式石棺である大戸鼻南古墳など、石障系石室の成立に関係すると思われる古墳が存在する。

但し、この1類の石障系石室の確実な例は天草では、大戸鼻北古墳、長砂連古墳の2例のみである（図2-1・2）。或いはこれに広浦古墳が加わるかもしれないが、5世紀の後半までは継続しないようである。またこの3古墳群のみに装飾が見られること、加えて、カミノハナ古墳群、千崎古墳群、竹島古墳群はある程度の基数で古墳群を構成するのに対して、1類石室の古墳群は、箱式石棺を除けば単独または2基程度からなり、前者と構成に違いがあるなど、天草地域の中では、この1類石室は、特別な石室かもしれない。その他、大戸鼻北古墳を含む大戸鼻古墳群や広浦古墳は、円文・武具等の装飾文様や箱式石棺を含む古墳群の構成など、球磨川下流域の小鼠蔵古墳群や大鼠蔵古墳群との関係が強い。一方の長砂連古墳は、直弧文の文様からは岡山の千足古墳との関係がうかがわれ、また宇土半島のヤンボシ塚古墳と同様、石障石材としてピンクと灰色の2種類の凝灰岩を使い分けていることなど、3類石室との類似点が多く、宇土半島地域との関係がうかがわれる。

次の特色として挙げられるのは、天草地域独特の石室の存在である。肥後の初期横穴式石室の7割以上は1類石室であるが、天草地域を除くと、その比率は9割近くと急激に高くなる。一方2類から4類を合わせても県下で12例に過ぎないが、そのうち天草地域が8例、隣接する宇土半島に3類石室が2例と集中する。特に天草では、1類・2類・4類の石室が存在し、バラエティに富み、特に4類石室は天草にのみ存在する。そこで、天草に存在する2類・4類石室について見ていきたい。平面形では、方形・長方形の違いはあるものの、いずれも石障を有さない石室である。また他地域に比べ石室規模が小さいという特徴がある。

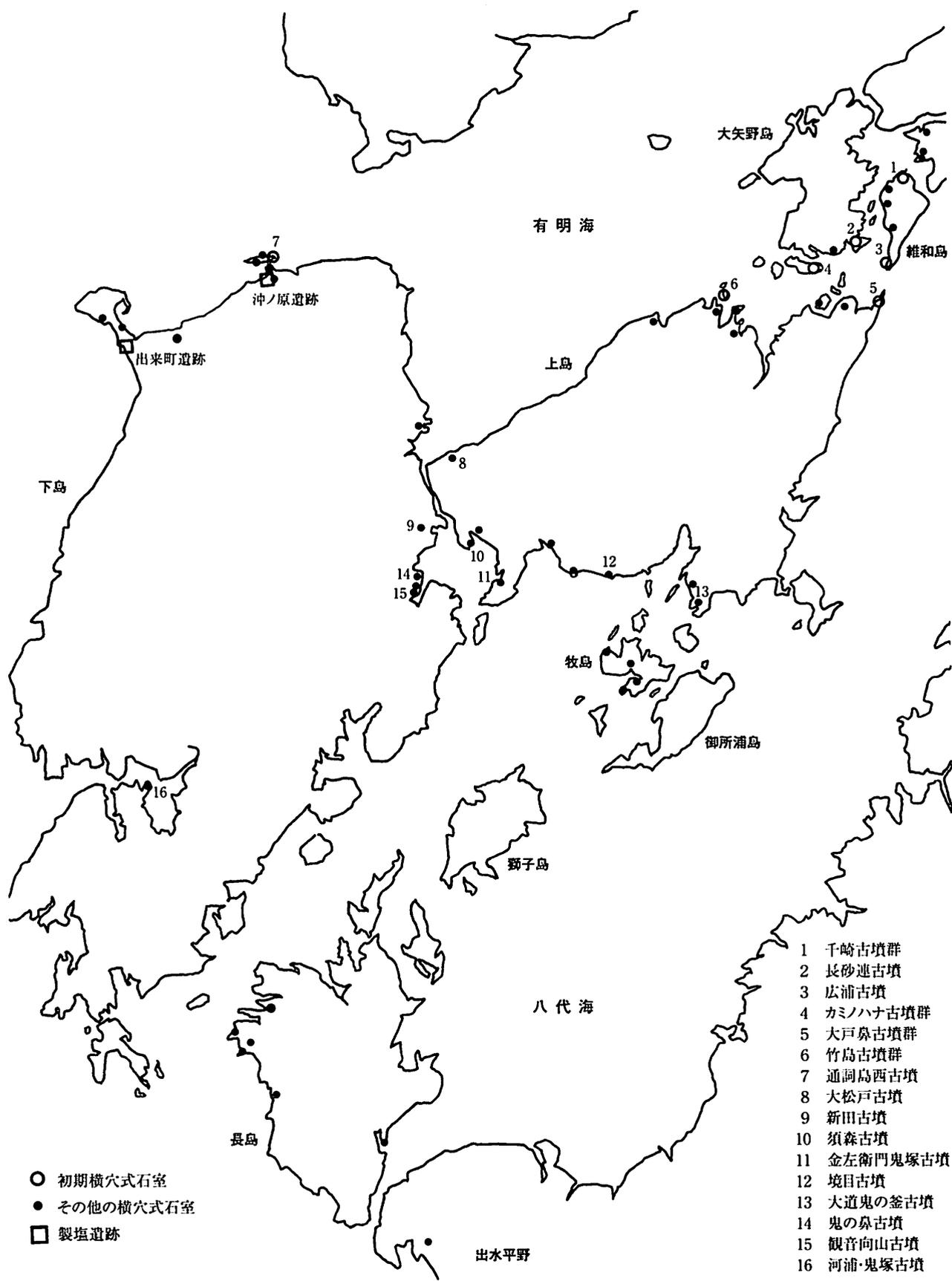


図1 天草周辺の横穴式石室等分布図

まず2類石室の竹島3号墳（図2-3）であるが、長さ約1.75m・幅約1.7mの方形プランの石室に玄門が付く。玄門の床面は、板石を5・6段積み上げており、玄室より40cm程高くなる。その前面（前庭部）は、現状で11段程の垂直な石積みで塞がれる。なお報告によると、この石積みと玄門の間に約10cmの隙間があるので、この隙間に一枚石の閉塞石が立てられていた可能性があるという。一方玄室内部は、「川」の字形の屍床配置をとる。左右の屍床とも前壁側、奥壁側（小口）は、一枚の板石で構成されており、箱式石棺を強く意識した造りとなっている。つまり、玄室内の左右に箱式石棺を配置した形状となる。この竹島3号墳の玄門部の構造は、羨道と呼べるほどの長さはないものの、玄室床面より一段高くなることや、閉塞石の前面を割石でほぼ垂直に積上げるなど北部九州の鋤崎古墳の羨道から前庭部の構造に類似する。また前面割石は認められないものの、この構造はやはり北部九州型石室である宇土半島の城2号墳とも類似する。

次に4類石室であるが、まず千崎5号墳（図2-6）について見てみたい。千崎5号墳は、長さ1.68m・幅1.25m程の長方形プランの玄室に、長さ59cm・幅30～42.5cm程の短い羨道が付く。羨道の床面には板石が敷かれ、玄室より4cm程高くなる。但し羨門側では床石が認められず、粘質土になる。羨門の閉塞には一枚石が使用され、更に閉塞石の前面を割石でほぼ垂直に積上げる。この石室の特色は、玄室基底部に長さのある石材を横位に配置し腰石風にすることである。一般に腰石と言われるものと比べると高さがないように見えるが、三分の二程度は床面下に埋められている。また、肥後において、屍床配置は「コ」の字形の3屍床、或いは「川」の字形の2屍床が一般的であるが、千崎5号墳では、玄室右側壁に沿って一つだけ屍床を設けている。類例として塚原古墳群内の将軍塚古墳やりゅう岩塚古墳があるが少数例である。また奥壁の腰石状の石材は、屍床にあたる側だけが高くなっている。これも、この屍床を箱式石棺とみなす意識の表れではないだろうか。

以上竹島3号墳と千崎5号墳を比較すると、方形プランか長方形プランかの違い、屍床配置の違い、玄室床面と玄門（羨道）床面の段差の違いはあるものの、玄門側に床石を敷き、閉塞石の前面を割石でほぼ垂直に積上げる閉塞方法、屍床を一つの箱式石棺とみなすなどの共通性が認められる。時期を決定する資料はないが、玄室床面と玄門（羨道）床面の段差の差が大きい竹島3号墳を古く位置づけたい。

その他カミノハナ古墳群（図2-4・5・7～9）も4類石室に分類される。カミノハナ古墳群の1号から6号墳は、すべて幅の狭い長方形プランの単室無羨道型横穴式石室である。巨石を立て袖石とすること、「コ」の字形に腰石を配置すること、また玄室内前壁側に沿って、闕石を配置するという、共通点がある。また前庭部が玄室に向かって下降し、闕石の上端に接し、闕石の高さ分玄室床面と段差が生じることもほぼ共通する。床面まで破壊されている石室もあるが、屍床区画のための仕切石やその痕跡がいずれの石室からも検出されていないことから考えると屍床区画は無かった可能性が高い。その他細部では、ほとんどの石室（1・3・5号墳で顕著）で、腰石の背後から上部の石材を積んでおり、腰石の上に直接石材が載っていない箇所が多く見受けられ、闕石を前障と捉えるなら、石障系石室の流れをくむものとも考えられる。しかし、1類・3類の石障系石室では、加工した板石を石障として使用し、石障の高さも均一であるのに対し、カミノハナ古墳群では、ほとんど加工されていない巨石を使用し、厚く、高さも不揃いである。遺体を囲うのが石障の第一義的な目的とするなら、カミノハナ古墳群のそれは、石室の壁体とすることが第一義的目的ではないだろうか。石室の下部壁体を割石で構成していたものを、巨石で代用する省力化のためが主たる目的であったと考える。北部九州の竪穴系横口式石室の影響、千崎5号墳の腰石風の構造からの発展或いは石障系石室がその

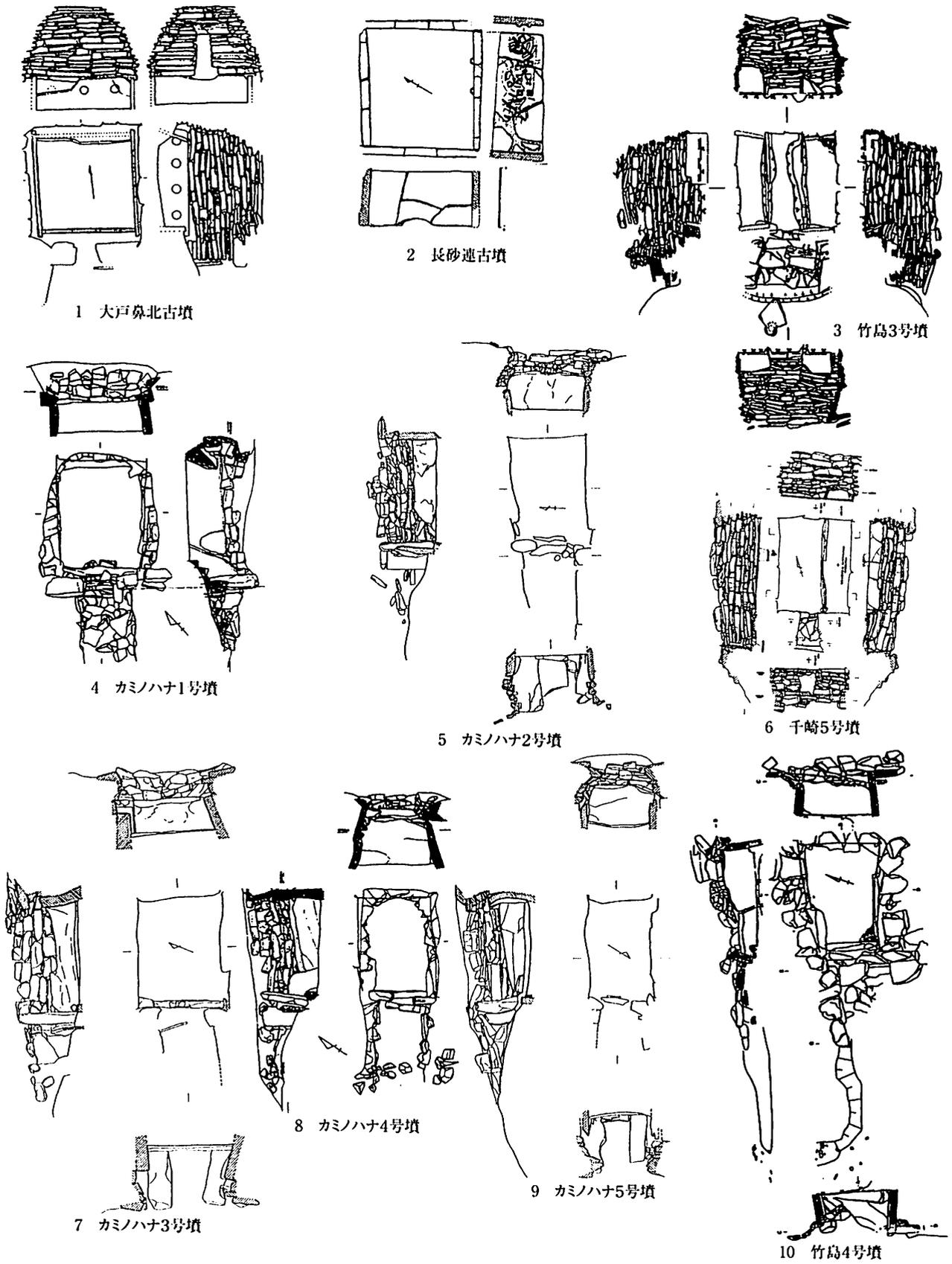


図2 初期横穴式石室 (Scale: 1/100)

ヒントとなったものかも知れない。なお、石室構造の変遷から見れば、方形に近い1号墳から、より玄室幅が狭くなる2号墳や5号墳への変遷、また玄室幅いっぱいの長さで前障のような闕石をもつ1・3・4号墳から、玄門幅ほどに短くなった闕石をもつ2・5号墳への変遷が想定される。

また竹島古墳群中の竹島4号墳の石室（図2-10）も4類石室である。単室無羨道型横穴式石室で、腰石の背後から上部石材を積んでおり、闕石の存在と併せてカミノハナ古墳群の石室構造に類似する。また屍床区画の仕切石が検出されないことも同様である。

時期については、カミノハナ古墳群の1号墳が5世紀後半、3号墳が5世紀末、竹島4号墳は、6世紀初頭の年代がそれぞれ出土した遺物より考えられている。一方竹島3号墳や千崎5号墳は時期決定となる資料がないが、竹島3号墳の玄門部構造が鋤崎古墳に類似していることから、カミノハナ1号墳より古い石室と考えている。また、前述したように千崎5号墳は、竹島3号墳より後出するものの、石室構造からみれば、竹島3号墳に近く、カミノハナ古墳群より先行するものと考えられる。つまり、竹島3号墳→千崎5号墳→カミノハナ1号墳→カミノハナ3号・4号墳→カミノハナ2号・5号・6号墳、竹島4号墳といった流れが想定できる。また竹島3号墳と4号墳は、同一の古墳群内にあることから、上記の石室構造の流れも一連のものである可能性が高いと考えるのだが、同じ4類石室でも千崎5号墳とカミノハナ1号墳や3号墳との間には、玄門の構成等構造的に飛躍がある。一番の相違は、仕切石による屍床区画が認められないことである。

竹島3号墳、千崎5号墳などの石障を有さない石室でも、遺体安置場所を当初から計画し、石室に組み込む点では肥後の石障系石室と共通している。恐らく遺体安置施設一つ一つを、箱式石棺と想定したものであろう。ところが、カミノハナ古墳群では、仕切石による屍床区画がない。これは大きな相違である。勿論ドーム形になることが想定される天井や、石障的な腰石と闕石の配置など、一般に肥後の特色と言われている要素もある。また平面プランや石室規模も千崎5号墳と大差ないのだが、すべて1.4m以下の幅の狭い長方形プラン、仕切石による屍床区画を持たないこと、或いは腰石の使用など竪穴系横口式石室の要素が加味されたように感じる。このカミノハナ古墳群に代表される石室のその後については、残念ながら6世紀前半代に該当するような石室構造が不明であるので、わからないが、腰石の背後から、上部の石材を積む壁体構成は、6世紀後半代の石室でも認められる。また長方形プランの石室も少なからず存在するので、何らかの影響を与えているのかも知れない。

その他、球磨川下流域から有明海へ向かう航路において必ず通過する、大矢野島南端と上島北端に挟まれた大戸ノ瀬戸や柳ノ瀬戸付近に広浦古墳・大戸鼻古墳群・長砂連古墳・カミノハナ古墳群・竹島古墳群が分布することも特徴の一つである。

（3）北部九州型横穴式石室の可能性のある石室（図3）

石室の分類の項目のところで、「少数の北部九州型石室を除けば」と記述したが、その少数の石室とは、関川下流域の荒尾市の別当塚東古墳、宇土半島の城2号墳及び竪穴系横口式石室と言われている菊池川流域の城ヶ辻7号墳や朱塚古墳であるが、この天草地域に存在する通詞島西古墳（図3-1）もその可能性のある古墳である。

通詞島西古墳は、長さ2.35m・最大幅1.5m程の羽子板形の長方形プランで、明確な腰石は存在せず、やや大きめの石材で壁面を構成する。奥壁と前壁の持ち送りは弱く、複数石で天井を構成する。肥後において類似石室は見当たらない。北部九州まで広げても、全く同じ石室はないものの、竪穴系横口式石室の系譜を引く宗像地域の単室無羨道型横穴式石室や肥前の関行丸古墳（図3-2）、那珂

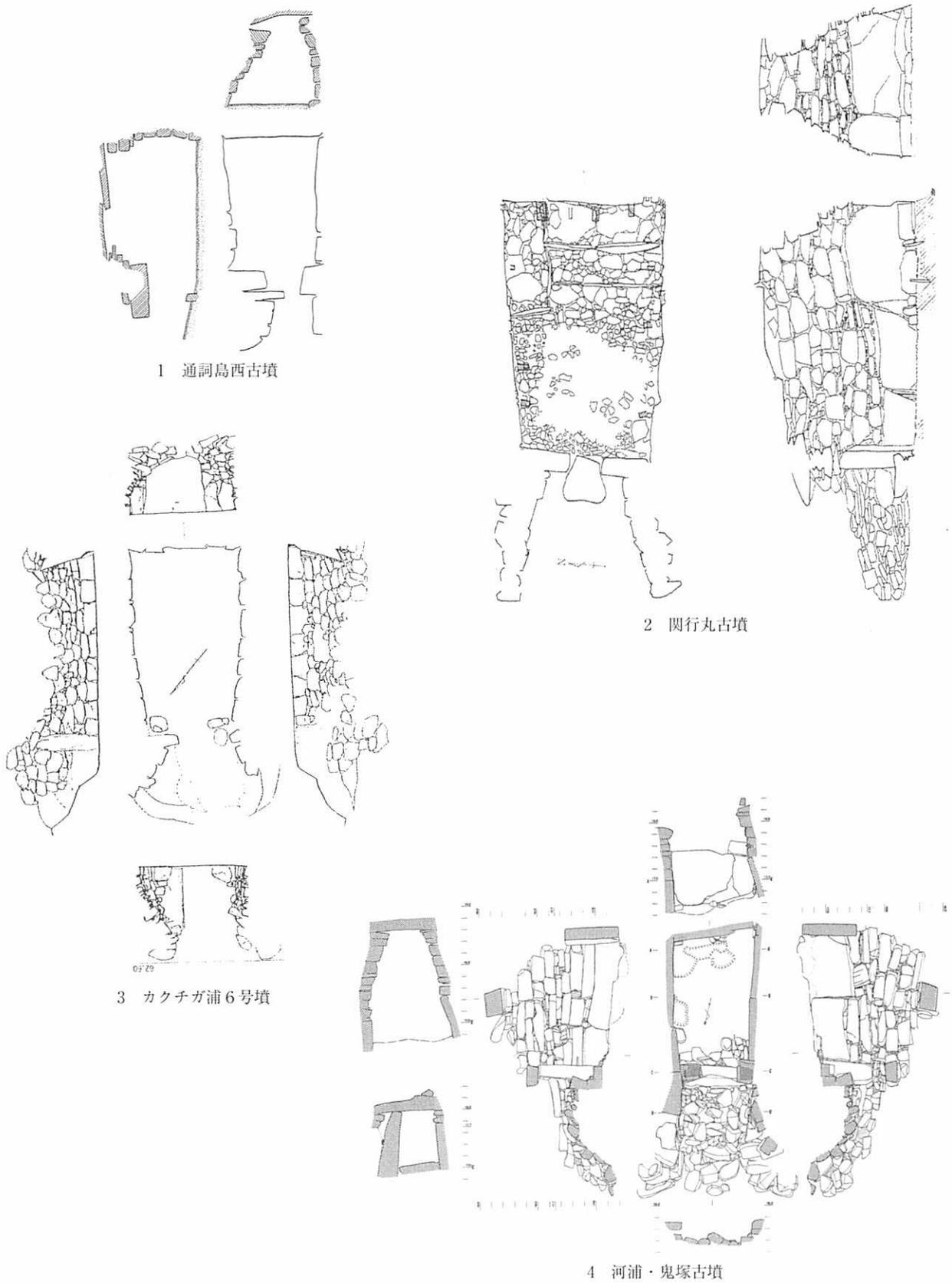


図3 北部九州型横穴式石室と関連する石室 (Scale : 1 / 100)

川町のカクチガ浦3号墳・6号墳（図3-3）などが関係ありそうな石室として浮かんでくる。但し通詞島西古墳では明確な腰石は認められず、また石室規模も小さく、関行丸古墳の半分程度の面積である。関行丸古墳やカクチガ浦3号墳・6号墳は、5世紀後半から6世紀初頭頃の石室である。一方通詞島西古墳周辺で6世紀中葉頃の須恵器が表面採集されているようであるが、詳細は不明である（坂本1971）。

これに関連するものとして、沖ノ原製塩遺跡の存在がある。通詞島西古墳の周辺に立地し、少なくともTK208型式期からTK47型式期の時期には製塩がおこなわれている。藤本貴仁氏は、今後の検討課題と言う但し書き付きではあるが、「玄界灘沿岸地域の製塩土器の影響下に天草式（製塩）土器が成立したとみられる」としている（藤本2004：p.42）。このことから考えると5世紀後半から6世紀初頭にかけて、北部九州と関連が認められ、そのような中で、北部九州型の横穴式石室がこの地域に出現してもおかしくはないし、その築造年代も、5世紀後半から6世紀初頭であっても不自然ではない。

（4）小結

天草地域は、地下式板石積石室、精巧な造りの組合せ式箱式石棺、石棺系石室、小規模な竪穴式石室など、様々な墓制が存在する。特に精巧な組合せ式の箱式石棺の分布や装飾古墳の文様から、更に球磨川下流域から有明海に抜ける航路で必ず通過する大戸ノ瀬戸や柳ノ瀬戸付近に古墳が存在することなど、宇土半島や球磨川下流域との関連が強うかがえる。こういった様々な墓制を下地としていち早く石障系石室が成立したのかも知れない。しかし継続せず、天草地域では、非石障系の独自の初期横穴式石室が展開していく。

一方、他の肥後地域に比べると北部九州的要素も多くみられるようである。例えば千崎古墳群及び桐ノ木尾ばね古墳出土の人骨は、北部九州古墳人や弥生人に近い特徴を示すことも含め（中橋2006 a・2006 b）、前述の天草式製塩土器や北部九州型横穴式石室の可能性がある通詞島西古墳の存在、或いは竹島3号墳の玄門部の構造やカミノハナ古墳群などに見られるような、長方形プランの石室や腰石の使用、また仕切石による屍床区画をしないなどの要素である。

またカミノハナ古墳群の横矧板鋌留短甲や独立片逆刺長頸鏃は、大阪平野南部の中央政権との関連が見られるといい（杉井2007）、まさしく海を媒体として広範囲な交流がうかがえる。但しその交流が、天草地域が主体となり行っていたか、或いは宇土半島や球磨川下流域の勢力を介してなのかは、今後の検討課題であるが、北部九州型石室である城2号墳の存在や天草砂岩や馬門石製の石障を持つ3類石室の広範囲な分布などからは、宇土半島地域と連携した交流の可能性が高いように思われる。また、天草独自の石室の存在からは、ある程度の独自性を保っていたことが考えられるのではないだろうか。

2 後期横穴式石室

後期になっても天草北部地域の大戸ノ瀬戸・柳ノ瀬戸付近では古墳の築造は認められるが、新たに本渡瀬戸で隔てられた上島と下島の両岸地域や上島の南岸地域、或いは下島の北岸地域といった天草南部地域でも古墳の築造が始まる。数的には、天草北部地域を凌駕するようである。

（1）分類

古墳時代後期の肥後の横穴式石室は、河川ごとに地域性が見られ、菊池川流域では、複室構造の方形プランの石室に、石屋形を持ち、装飾が施される。白川下流域は、細長い羨道を持つ単室の方形プランの石室で、石屋形を持ち装飾が施される。一方肥後の南部は、切石を用いた長方形プランの石室となり、石屋形か石棚を有するという特徴がある。

一方天草の石室は、その多くが天井石を失い腰石のみの残存である。すべて単室の両袖型の横穴式石室であり、現在のところ複室は確認されていない。また装飾・石屋形も認められていない。平面プランは、方形のものと長方形のものがある。方形プランの石室は、境目古墳を除けば、現存するものは、すべてドーム形天井であるので、腰石のみ残存する石室もドーム形の可能性が高い。一方長方形プランの石室の天井形態はやはりドーム形になると推察されるものが多い。しかし1例だけではあるが、複数石からなる天井構成（平天井）を予想させるものがある。以上から便宜的に方形プランの石室をA類、長方形プランで、ドーム形天井になると予想されるものをB類、長方形プランで、平天井になるものをC類とする。但し、A類とB類については、平面形以外は大きな違いはないようであるので、一括して記述する。

(2) A・B類石室 (図4)

まず、方形プランの石室のA類であるが、新田古墳や大松戸古墳を挙げることができる。天草地域の主流である。一方長方形プランでドーム天井の石室であるB類は、鬼の鼻古墳・須森古墳・観音向山古墳を挙げることができる。石室の基底は、巨石を「コ」の字形に配置し、腰石とする。前壁を構成する巨石は、袖石を兼ね、左右に各一石を並べている。羨道は、完全に残存しているものは少ないが、巨石各2石を配置するものが多く、玄室長を上回る長さのものは認められない。また幅は、玄室幅の半分以下の狭いもの（金左衛門鬼塚古墳・境目古墳・須森古墳）と三分の二程度の比較的広いもの（新田古墳・大松戸古墳）が存在する。

最大の特色は、上部の石材の積み方にある。腰石の奥まった位置から積み上げるものや、腰石の背後から積み上げるものが見られる。腰石の背後から積み上げる例としては、須森古墳において顕著で、一見すると石障のようにも思える。池田栄史氏は、この天草地域に見られる技法で造られた石室を「天草型」横穴式石室（池田1982）と呼んでいる。しかし、前壁・後壁・側壁の四方すべてが、腰石の背後や奥まった位置から積み上げる石室はなく、腰石の奥まった位置から積み上げる部位や腰石の背後から積み上げる部位に加えて腰石との出面をそろえて積み上げる一般的な積み方も共存している。これは腰石の形状によるもので、天草地域の腰石は、ほとんど加工されていない巨石で、上端面も平坦でないことから、腰石の背後や奥まった位置から石材を積んだものと考えられる。例えば大道鬼の釜古墳の左腰石の上端部の厚さは狭いところでは5cmにも満たないので、上部の割石をこの面から積み上げるのははなはだ不安定である。ほとんどの箇所を腰石の背後から積んでいる須森古墳は、腰石は薄くまた高さも不均等であったためと考えている。腰石の奥まった位置や背後から割石を積み上げる技法は、既に初期横穴式石室であるカミノハナ古墳群で認められる。また肥後南部の国越古墳や宇賀岳古墳など宇土半島基部や大野窟古墳など氷川下流域でも腰石の奥まった位置から積み上げるものが認められる。但し肥後南部の石室の目的は石屋形の天井石や石棚をそこに架け渡すためである。しかし、同地域の小規模な石室では、天草同様腰石の高さや厚みが均一でないため、腰石の奥まった位置から積み上げる例もみられる。これは天草地域で認められる積み方と同様である。意識して肥後全域をみた訳ではないので、断言はできないが、恐らく腰石の高さ・厚さが均一でない場合、やむを得

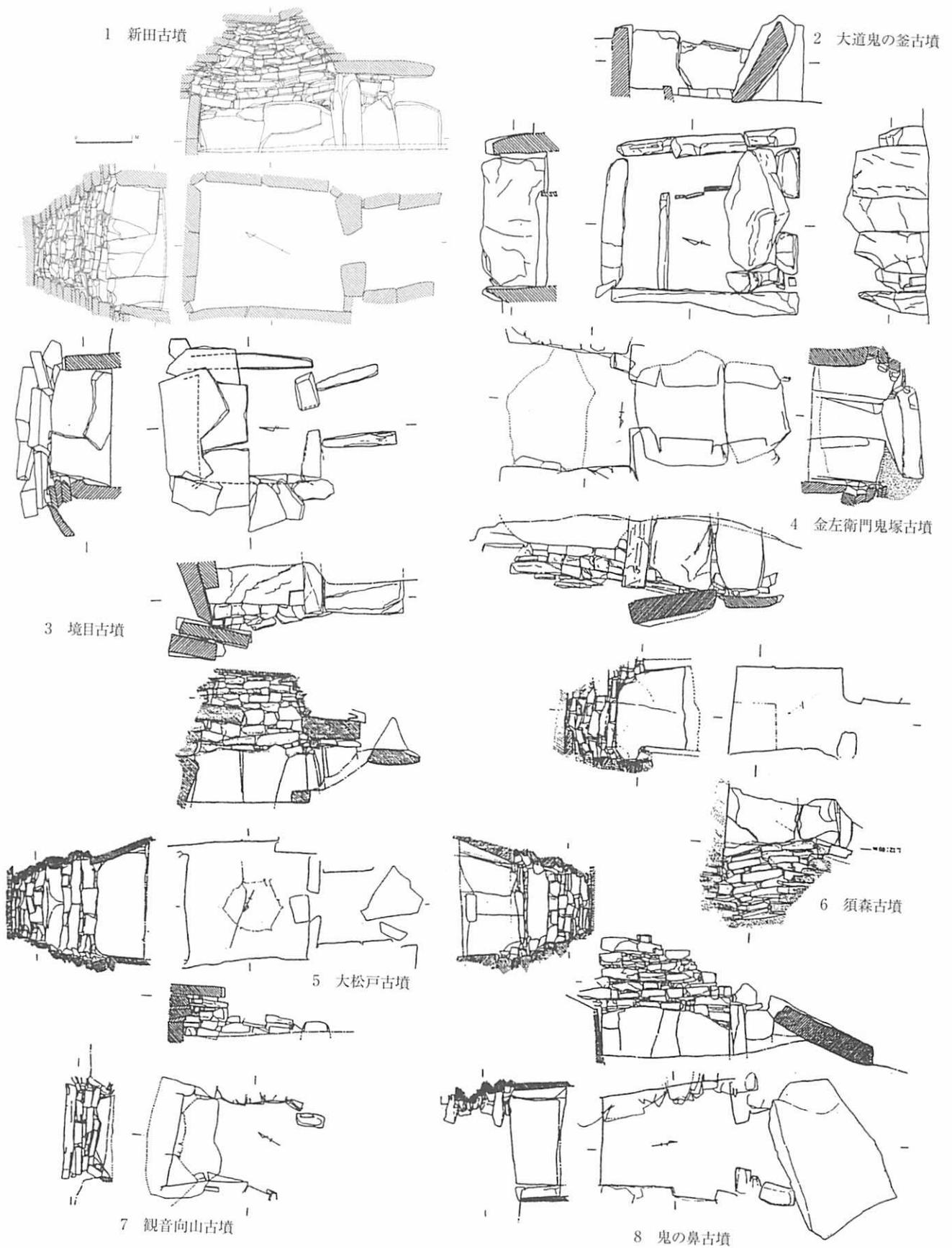


図4 6世紀代の横穴式石室 (Scale: 1/100)

ず使用する技法ではないかと考える。但し天草地域に顕著であり、また確実に腰石の背後から積み上げる事例は天草地域以外では確認していない。

その他、注目される施設としては、大松戸古墳の石棚が挙げられる。肥後においては、水川下流域から宇土半島にかけての肥後南部で顕著である。大松戸古墳の石棚の特徴としては、腰石の上に2・3段の石積をした後に石棚を設置することにある。肥後の石棚は、腰石の上に直接設置するものが多く、例外は、植木町の石川山3号墳と大松戸古墳の2例だけである。但し、観音向山古墳も石棚の可能性はある。この古墳は長方形プランの石室である。腰石の上に2・3段程の石積みをし、巨石が載る。ほぼ垂直に積み上げているが、玄室コーナは石材を両壁に架け渡すなど、ドーム形天井になる要素もみられる。また床面の大半が土で埋まっていることもあって石室構造上、理解に苦しむ石室であった。しかしこれまで天井石と考えていた巨石を石棚ととらえ、石棚の下の部分まではほぼ垂直に積み、これから持ち送りが急になり、ドーム形天井になると考えれば、石室構造上理解しやすい⁽²⁾。そうであるなら、腰石の上に直接石棚を設置しない例がもう1例増えたことになる。

肥後において石棚設置の相違が、単なる高さ調整のためなのか、或いは他に何か理由があるのか明確には出来ていない。県下の石棚の床面からの高さは、床面の調査が行われているものが少なく正確ではないが、内法で2mまでで、1.6m程度のものが多い。但し低いものは1.2mのものも存在する。大松戸古墳は約1.5mで、仮に腰石の上に直接載せた場合の高さは約1mとなりやや低すぎるので、高さ調整のための可能性もある。しかし天草は石屋形が存在しないこともあり、棺とみなしているのか否かという意識の差の可能性も完全には捨て切れない。腰石に直接石棚を設置するものは、石屋形同様、石棚を棺の天井石とみなし、側壁、奥壁を一石で構成する棺の意識が強く、一方大松戸古墳のように腰石の上に2・3段の石積後に石棚を設置するものは、例えば同様な構造の桂川王塚古墳のように棺としての意識より覆うという意識が強かったのかもしれない。この場合、伝播元の違いの可能性も考えなければならない。いずれにしろ、現時点ではどちらとも断定できないが、天草地域の石棚も肥後南部の石室構造の特徴の一つとして捉えておきたい。

なお、境目古墳については、腰石と上部石材が若干残っているだけで、どこまで原位置を保っているか不明であるが、現在の天井石が原位置であるとすれば、八代地域に集中する鬼の岩屋式の石室に類似する。

最後に石室規模について触れておきたい。石室床面の面積の規模で見た場合、大まかに3つに分類できる。一つは、6㎡を越す大型のもので、周辺に立地する新田古墳や上島南岸の大道鬼の釜古墳が該当する。また4㎡から5㎡の中型のものは、本渡瀬戸周辺では、大松戸古墳や鬼の鼻古墳が、上島南岸では、金左衛門鬼塚古墳や境目古墳が該当する。4㎡以下の小型のものとしては、本渡瀬戸周辺では、須森古墳と観音向山古墳が、上島南岸では、牧島に所在する古墳が該当する。既に破壊されてしまった石室もあるので、断定的なことは言えないが、大型の石室である新田古墳と大道鬼の釜古墳は、それぞれ本渡瀬戸周辺地域、上島南岸地域の中心となる石室の可能性はある。

(3) C類石室 (図3-4)

旧河浦町鬼塚古墳1例だけある。立地(図1-16)も他の横穴式石室からやや離れた場所に単独で存在している。単室無羨道型横穴式石室である。長さ2.2m・幅1.4mの長方形プランの石室で、「コ」の字形に腰石を配置する。また前庭部まで玄室と同じ幅で続く。上部の持ち送りは弱く、天井部はかなり破壊されているが、恐らく複数の天井石で天井部を構成していたものと考えられる。平面プラン

や列石の存在など、カミノハナ古墳群と関連するものかも知れないが、鬼塚古墳から出土した遺物は6世紀後半から7世紀前半代のもので、あまりにも時間差がありすぎる。また浅学なだけかも知れないが、北部九州においても、6世紀後半代の石室で類似した石室を挙げるができない。或いは時期的にもう少し古くなる石室かもしれない。北部九州との関連が強い石室であると思うが、判断は保留したい。

（4）小結

主体は、ドーム形天井・方形プランの石室であるが、一部長方形プランの石室もある。前述のとおり、県下の首長級の古墳と比較すると、複室・装飾・石屋形を持たない点で異なる。しいて言えば、肥後南部の石室が一番類似するが切石は使用していない。但し複室構造・装飾・石屋形は主として首長系列の古墳に採用されるものであるので、天草以外でも首長系列以外の石室では、複室・装飾・石屋形は持たない。前述したように腰石の背後から積み上げる技法や長方形プランの石室の存在が顕著であることが天草の石室の特徴と言えるだろう。但し全体的には、石棚の存在や境目古墳のような八代地域に集中する鬼の岩屋式類似の石室の存在、或いは、長方形プランの石室の存在も肥後南部の首長墳の平面形プランが長方形であることからの影響と考えれば、天草地域も肥後南部の中の一つの地域として捉えることができる。

3 まとめ

天草は前方後円墳が存在しない地域であり、強力な首長層が存在しなかったせい、5世紀代までは、地下式板石積石室を始めとする多様な墓制が存在した。八代海側から有明海側へ抜ける際、必ず通る大戸ノ瀬戸・柳ノ瀬戸付近にいち早く石障系横穴式石室が出現する。しかし5世紀代を通しては継続しない。代わって天草独自の横穴式石室が成立する。基本的には、ドーム形天井をとり、肥後の初期横穴式石室との関係が強いが、北部九州的な要素も、他の肥後地域より強く認められるようであり、その要素が加わることによって地域性の強い石室が成立したのかも知れない。一方6世紀代になると、天草南部でも横穴式石室が採用され始める。その石室は、肥後南部地域で認められる石室とほぼ同様である。つまり古墳時代全期間をとおして、肥後南部地域との繋がりが顕著であるが、それでも5世紀代は石室構造に独自性も見られたのが、6世紀になると、その独自性も薄れ、肥後南部の石室構造とほぼ同様なものになってくる。

また古墳の分布と、当時の航路とは密接な関係があることが考えられている。古墳の分布から考えると、5世紀代は、球磨川下流域から大矢野島と上島に挟まれた大戸ノ瀬戸・柳ノ瀬戸をとおり、有明海に出る航路が、また宇土半島の南岸からは、維和島西岸に沿って進み、やはり大戸ノ瀬戸・柳ノ瀬戸を通過して有明海に出る航路が想定される。特に大矢野島と上島に挟まれた大戸ノ瀬戸・柳ノ瀬戸が重要視されたのであろう。6世紀代になると、前述したように天草南部にも横穴式石室が普及する。その数は天草北部を凌駕するようである。古墳の分布から考えると、それは杉井健氏が指摘するように、大矢野島南岸と上島北岸に挟まれた大戸ノ瀬戸・柳ノ瀬戸を西に抜け、更に上島北西側を南西に進み、それから下島と上島を隔てる本渡瀬戸を通過し、下島南東海岸と牧島・御所浦島・獅子島・諸浦島に囲まれた海域を南下し、長島西海岸沿いを南下して、阿久根や川内平野に至るルートが想定できる（杉井2007）。或いは、本渡瀬戸を抜けた後、牧島或いは上島南岸の棚底湾や栖本湾に一旦向かったことも考えられる。また下島北岸の古墳の分布は、沖ノ原遺跡を始めとする製塩遺跡が出現し

始めたことによると考えられる。上記のルートを使い、塩の運搬も行われたことは想像に難くない。古墳の分布から考えると確かに上記ルートが想定されるのではあるが、球磨川下流域側からの航路を想定する場合、一旦上島の北西側に回り有明海に出て、再度八代海に戻るルートは不合理のように思われる。球磨川下流域から上島東海岸に沿って進み、上島の南岸や牧島に進むルートがあってもおかしくはないようにも思える。しかし現在確認されている古墳は、上島東側には存在せず、上島南岸に存在する古墳の立地も八代方面を望んではいない。短距離や私的な往來のルートは様々な航路があったのであろうが、公的なものや遠距離で一定の規模をもった運搬等には、前述の航路であったと考えざるを得ない。この航路の確立或いは製塩の開始が、天草南部地域に、多くの横穴式石室が出現する要因であろう。しかしこの航路の確立、製塩の運営と交易の主体が、天草地域単独であったことは考えにくく、石室の様相からすると、肥後南部の中でも氷川下流域の野津古墳群の首長主導のもと、航路の確立や製塩の運営が行われたものかもしれない。またその背景には、中央政権の意向があったのかも知れないが、このことについては今後の検討課題としたい。

注

- 1) 藤山甲塚古墳は、長さ2.2m、幅1.8m程度で方形プランか長方形プランか微妙な比率の平面プランである。天井は、3石からなる平天井ではあるが、両壁隅は、石材を両壁に架け渡すなどドーム形天井で認められる力石の技法を使用している。厳密に言えば3類石室の範疇に入らないものかも知れないが、長方形気味の平面プランに石障を持つので3類石室として取り扱っている。
- 2) 2007年3月、「八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の発達過程に関する基礎的研究」に係る研究者と天草地域の古墳を2日間にわたり見学した。実際に古墳を見ながらの話し合いは大いに参考になった。中でも観音向山古墳では、高木恭二氏から「天井石ではなく石棚とは考えられないか」という助言を得た。

引用・参考文献

- 池田栄史 1981『河浦町郷土史（第5輯）』河浦町教育委員会
- 池田栄史 1982「天草における横穴式石室の一例」『肥後考古』第2号 肥後考古学会：pp.96-103
- 神川めぐみ編 2006「広浦古墳測量・実測調査報告」『考古学研究室報告』第41集 熊本大学文学部考古学研究室：pp.27-42
- 木村龍生 2007「中九州における中期古墳の編年」『九州島における中期古墳の再検討』第10回九州前方後円墳研究会宮崎大会発表要旨・資料集 九州前方後円墳研究会：pp.161-181
- 藏富士寛 2002「石棚考-九州における横穴式石室内石棚状施設の成立と展開-」『日本考古学』第14号 日本考古学協会：pp.21-36
- 杉井 健 2007「古墳時代の矢野」『上天草いにしへの暮らしと古墳』上天草市史大矢野町編1 上天草市：pp.123-345
- 小林行雄 1976「直弧文」『古墳文化論考』平凡社：pp.483-540
- 坂本経堯・坂本経昌 1971『天草の古代』私家版
- 高木恭二 1986「鴨別と鴨籠」『Museum kyusyu』21：pp.34-40
- 高木恭二 1994「石障系横穴式石室の成立と変遷」『宮嶋クリエイト』第6号 宮嶋利治学術財団：pp.110-132
- 谷口義介 1990「総合研究 天草 第11章 天草における横穴式石室墳の展開-有明町竹島3・4号墳を中心に-」『熊本商科大学産業経営研究所叢書』17 熊本商科大学産業経営研究所：pp.63-87
- 中橋孝博 2006a「熊本県上天草市維和島・千崎古墳群出土の古墳時代人骨」『考古学研究室報告』第41集 熊本大学文学部考古学研究室：pp.85-93
- 中橋孝博 2006b「熊本県上天草市維和島・桐ノ木尾ばね古墳出土の古墳時代人骨」『考古学研究室報告』第41集

熊本大学文学部考古学研究室：pp. 94-96

藤本貴仁 2004「天草式製塩土器の再検討」『熊本古墳研究』第2号 熊本古墳研究会：pp. 33-49

古城史雄 1998「肥後における古墳の調査3 大道鬼の釜古墳・境目古墳」『考古学研究室報告』第34集 熊本大学文学部考古学研究室：pp. 7-11

古城史雄 2007「肥後の横穴式石室について」『日本考古学協会2007年度熊本大会研究発表資料集』：pp. 35-55

本渡市教育委員会編 1984「本渡市の古墳（1）」本渡市文化財調査報告第4集

前田真由子編 2006「千崎古墳群第4次調査報告」『考古学研究室報告』第41集 熊本大学文学部考古学研究室：pp. 1-26

松根恭子 2004「九州の土器製塩研究」『熊本古墳研究』第2号 熊本古墳研究会：pp. 51-73

南健太郎編 2005「長砂連古墳石障実測調査報告」『考古学研究室報告』第40集 熊本大学文学部考古学研究室：pp. 39-50

山野ケン陽次郎・有馬絢子編 2008「千崎古墳群第6次調査報告」『考古学研究室報告』第43集 熊本大学文学部考古学研究室：pp. 1-36

米倉秀紀編 1982「カミノハナ古墳群2」研究室活動報告14 熊本大学文学部考古学研究室

挿図出典

図1：古城史雄作成

図2-1～4・8・10：九州前方後円墳研究会編『九州における横穴式石室の導入と展開』（1999）

5・7・9：古城史雄・松尾法博 1981「肥後・天草の古墳文化」熊本大学文学部1981年度卒業論文

6：山野・有馬編2008

図3-1：五和町史2002（五和町史編纂委員会 五和町）

2・3：九州前方後円墳研究会編『九州島における中期古墳の再検討』（2007）

4：池田1981

図4-1～8：九州前方後円墳研究会編『九州における横穴式石室の導入と展開』（1999）